

動は次々に女性の領域に組み込まれていった。

しかしこうした *unselfish* な動機に基づく行動には限界があった。家を出て社会のために働くという選択自体が、自己中心的に家族への義務を放棄する事になるという場合も多い。親や夫の死によって家族の義務を免れて初めて自分の人生を生きる女性たちが数多く存在していた。当時の女性の社会進出を促したのも阻んだのも自己犠牲を求める言説であり、公的・私的領域の別に関わらず、「女性の領域」は自己犠牲という特徴を持ち続けていた。

#### 〈考古学部会〉

### 中世関東における鍋の流通と消費

松下 高之

食物などを煮炊きするために、中世では鍋や釜と呼ばれる道具が使用されていた。中世における鍋や釜の使用例は絵画資料な

彙報

どに見ることができ、中世遺跡の発掘調査においてもその存在が確認されている。出土資料の材質や形態は多様性に富んでおり、列島各地で様々な煮炊きの道具が使われていたことが想定できる。

関東地方でも、中世を通して様々な鍋や釜が使用されていた。なかでも特徴的なのは、内側に複数の半円形の紐状突起がある鍋である。この突起のことを耳（内耳）と呼ぶため、この種の鍋を総称して内耳鍋という。内耳の用途については議論があるところだが、一般的には吊り紐をかけるためのものであると理解されている。内耳鍋の素材には鉄と土があり、鉄製が土製に先行する。諸条件により鉄製内耳鍋の出土例は少ないが、実際には東日本において広く使用されていたと推測される。土製内耳鍋は北関東・甲信・東北南部などの各地域で出土している。年代はおおよそ十四～十六世紀である。これ以外にも東北北部・北海道や東海でも出土するが、年代・形態・内耳の接続方法などに違いがある。なお、土製内

耳鍋は基本的に在地生産されていたと考えられている。

土製内耳鍋はその特徴的な形態から、古くから関心を集めてきた。近年では中世遺跡からの出土例増加にともない、関東甲信地方を中心に編年などの基礎的な研究が蓄積されている。土製内耳鍋は形態の特徴から大きく三つに分類が可能で、それぞれが旧国の単位で二箇国程度の分布圏を有している（常陸・下総・下野、上野・武蔵、信濃・甲斐）。この分布圏を特定の生産地の流通圏と捉え、その背後に政治権力の介入や流通機構の存在を想定するといった、中世史研究の動向をも視野に入れた高度な解釈が一部で行なわれている。しかし、このような解釈を支えるのに足るだけの出土事例の分析は依然として十分ではない。生産地や流通範囲についてのより詳細な研究が必要だといえる。ここでは出土事例の分析を行ない、土製内耳鍋の流通の問題について再検討を行なう。

器形の特徴・製作方法・法量・胎土の特

徴・内耳の数といった土製内耳鍋についての諸属性を比較し、分類について検討した。まず、従来から指摘されている出土地域に対応する三つの分類であるが、器形の特徴の違いを検討することによって、このような分類が概ね妥当であることを確認することができた。分布範囲については若干の修正ができるが、大枠は変更の必要がない。またこのような分布範囲の年代による顕著な変化も見られない。

次に器形以外の属性について検討する。

胎土は基本的に出土地域の在地のものを使用している。胎土分析資料が少なく全てにわたる詳細な検討はできなかったが、器形の特徴による分類にくらべて細かな地域区分が可能だと考えられる。焼成方法には酸化焰焼成と還元焰焼成の二種類があるが、常陸・下総・下野では前者が多く、それ以外の地域では後者が多いという傾向を見ることが出来る。概ね器形による分類に対応しているといえるが、一方で常陸・下総・下野においても還元焰焼成されている地域

もあるなど、器形分類と一致しない例も確認された。これ以外にも法量や内耳の数などいくつかの属性について検討を行なった結果、器形分類により設定された地域内にも多様性が存在していることがわかった。土製内耳鍋が出土するすべての地域においてこれら個々の事例を比較して明確な小地域を設定することはできなかったが、とくに房総地域などでは器形による分類とは異なる小区分の存在を明らかにすることができた。

器形以外の属性に注目することによって、従来の分布圏内においてさらに詳細な地域区分が可能であることを指摘した。次にそれぞれの分類が持つ意味について考えてみたい。前者は広い範囲に共通する製作技術を反映していると考えられる。この点についてさらに考察を深めるには、播鉢などの在地生産品や文献史学の研究成果などとの比較が必要である。後者は多様な様相を示しており、例えば生産地（窯）を表していると考えられることもできるだろう。生産

地遺跡はほとんど確認されておらず不明な点が多い。今回の分析結果は、生産地に対応するような流通範囲を考える手がかりとなる。また、資料分析過程において、茨城県出土資料から共通の簡記号を有するものを複数確認することができた。生産地と流通範囲を考える資料として興味深い。生産地の問題を考えるにあたり、このような点も考慮しながら引き続き分析を行なっていきたい。

## 相模川東岸における弥生・古墳の画期

中山 喬 央

相模川の東岸地域には弥生時代後期前半の半ば頃、西遠江、東三河方面の人達が大量に移住をしてきたという事実があり、その人達がどのようにして、この地域で古墳時代の社会を作っていたのかということを知りたいというのが、本論の目的である。